

主 題：信仰と罪：壊れた関係を修復する 1
聖書箇所：コリント人への手紙第二 7章5－6節

今朝、皆さんとともに学んでいくのは詩篇の続きではなく、Ⅱコリント7章のみことばです。少しの間、詩篇はお休みします。代わりに、今日から数回に亘って皆さんといっしょに考えたいことは「信仰者と罪について」です。

少しご自分の歩みを振り返ってみてください。皆さんが信仰生活を送る中で、それぞれの心を思い悩ませ悲しみや失望へと陥れるものにはどのようなものがあるのでしょうか？皆さんはどんな場面で心が痛み、落ち込み、喜びを失ってしまうようなことがありますか？私たちは様々な場面を挙げることができると思います。たとえば、絶え間なく続く罪との戦い、罪との葛藤もその一つでしょう。キリストの十字架という大きな代価をもって買い取られた私たち、だからこそ、私たちは喜んでみことばに従って、自分を救ってくださった主をますます愛し、その主の栄光を現す者として成長していきたいと、そのように望んで日々を歩んでいこうとします。

しかし悲しいことに、そのような願いを持っているにもかかわらず、私たちは何度も罪を犯して神様をひどく悲しませるようなことを平気で行ってしまうのです。そんな自分自身の愚かさや罪深さを目の当たりにすればするほど落ち込んで喜びを失ってしまうことは確かにあります。かつて、パウロも自分自身の葛藤をこのように記しています。ローマ書7：19、24「:19 私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。」「:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」、パウロも罪との葛藤を経験していました。

また、このような罪との葛藤だけではなく、この世にあってキリストの証しを立てようとする中で経験する難しさや理不尽な扱いというものも、悲しみを覚えるものの一つでしょう。私たちが職場や学校、住んでいる地域や家庭において、世の光として証しを立てようとするれば、そこには、闇を愛して、悪い行いが光に照らされることを憎む者たちからの反発や攻撃というものを受けることもあります。この世にあってキリストの福音を宣べ伝えようとするれば、それを拒む者から「おかしい変わった人」として扱われ、拒絶されることもあれば、その信仰に対して攻撃する者もいるのです。そのような苦しみや迫害というものが必ず存在しているということを、イエス様もまたパウロもはっきりと口に約束していました。たとえば、ヨハネ15：20でイエス様はこのように言われました。「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。…」、パウロもⅡテモテ3：12でこのように言っています。「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と。

ですから、私たちが主とみことばに従ってこの世にあって忠実に歩んでいこうとすれば、そこには例外なく戦いや葛藤があるのです。そのような大きな困難に直面するなら、私たちは心が痛み失意を覚えます。罪との戦い、この世における信仰の戦い、これらが私たちの心を悩ませ、大きな悲しみをもたらすものであるということはもう間違いありません。皆さん一人ひとりもよくご存じでしょう。

それだけではありません。私たちの経験する問題は、私たちの内側や神に敵対するこの世からだけやって来るわけでもないのです。私たちの問題はときに、同じ神の群れである教会の中からやって来ることもあります。同じ主に召され、同じ主を愛する兄弟姉妹との関係が原因で、大きな痛みというものを経験することもあるのです。恵みによってキリストによって、信仰によって救われた私たちも、残念ながら、それぞれのうちにまだ罪が残っているからこそ、お互いの間で罪を犯し、相手を傷つけてしまうことがあるのです。あるときは、口にすべきでないことを口にすることばで失敗してしまうことがあります。あるときは、ちょっとした勘違いやちょっとした思い違いで関係がこじれてしまったりすることもあります。また、奉仕や学びなどを教会でともにし、ともに時間を過ごせば過ごすほど、相手のことがより分かるようになって来ますが、相手のことをより知るほどに、相手の良い部分も当然見えて来ますが、その人のうちに残っている罪もまた見えて来ます。

皆さん、そんなときはどうしますか？その人の成長を助けたいと願って愛をもって罪を指摘しようとされるのでしょうか？でも、その人が自分の間違いを正されることを嫌って反発するかもしれません。助

けてあげたいと願ってしたこと反発され、拳句に怒りを露わにされるなら「もういいです、私はもう二度としたくない、しません！」と、心を頑なにしてしまうことがあるかもしれません。また、自分に対してだれかが罪を犯して、その時は「ごめんなさい」と相手が口で謝ったとしても、いつまで経ってもその人が変わらずに、何度も同じ過ちを犯すなら、そのような態度を取る相手に対して私たちは怒りや失望を心のうちに覚えるかもしれません。このようにいろんなものを挙げることはできます。

様々なことが原因となって同じ神の家族として生きているはずの私たちの関係が壊れてしまうことがあるのです。そして、そのようなことを繰り返して経験すれば、皆さんのうちにこんな疑問が生まれて来るかもしれません。職場や近所に住む未信者が神様に逆らってみことばに沿った行動をしていないのは分かります。彼らが約束を守らなかったとしても、上司や隣人たちが理不尽なことを口にしていたとしても、様々な罪を犯して自分に問題をもたらしたとしても、もちろんそれは悲しいけれど、でも、それはある面で理解できます。

でも、教会にあって、彼らと同じようなことをする人がいることは信じられません。同じように主を信じみことばを知っているのに、どうしてあんな態度を取ることができるのでしょうか？どうして何度も同じことを繰り返すのでしょうか？全く理解できない…。私たちは教会内において、ほかの兄弟姉妹が罪を犯せば驚いて心を乱してしまうことがあります。実際は、私たちが天でともにお会いするその日までこの地上で暮らすそのすべての間は、自分自身も含めて相手がだれであれ、私たちはみな罪を持っている以上、罪を犯してしまうし、相手も自分に対して罪を犯してしまうことがあるのです。キリストを信じ救われたからといって、いっさい問題がなくなるわけではないのです。

でも、ときに私たちは、教会の神の家族に対して完璧を求めることがあります。私たちは互いに同じように主によって赦された罪人であると分かっているながらも、罪を犯した相手に傷ついたことに関して「許せない」として関係が壊れてしまったりすることがあるのです。それが大きなものか小さいものか分かりませんが、そのような問題に私たちが直面することは多々あります。だからこそ皆さん、私たちはそのような問題が生じたときに、関係が壊れるような問題が生じたときにはみことばから行動しなければいけません。私たちはこのような問題を聖書的に解決する方法を知っていなければいけないのです。そして皆さん、そのような壊れた関係というものが、自分だけに痛々しいものではなく、相手にとっても悲しいものであるだけでなく、教会全体にとってそれが一致を壊す大きな問題であること、そのことが非常に大きな問題であるとよく分かっていたのが、今回見るⅡコリントのみことばを記したパウロでした。

これから私たちはそのパウロの模範をこのⅡコリント7章、特に5-16節のところを通して学んでいきますが、今日、皆さんとともにその内容を見ていく前に、そして、より深く理解するために、まずこの手紙を記したときのパウロの様子と、パウロとコリントの教会との関係について改めて考えてみたいと思います。ですから、よくみことばを見て、どのような関係にあったのかを見ていってください。

○歴史的背景：パウロの苦しみとコリントの教会との関係

●パウロの苦しみ：

まず、パウロがどんな状況にあったのか、皆さんもよくご存じのとおり、この手紙を記したパウロはこのとき、信仰ゆえに味わう危険や苦しみをたくさん経験していました。信仰ゆえに彼は様々な問題に直面し、死の危険を感じるほど苦しむことがあったのです。彼ほどそのような経験をした人はいないと言っても過言でないかもしれません。実際に、私たちがこの第二コリント書の全体を通して見たときにも、彼は自分自身の身にどれほどいのちの危険が迫っていたのか、どれほどの苦しみに遭っていたのかを繰り返し教えています。たとえば、1章を見ると、このようなことばで始まっています。8-9節を見ると「:8 兄弟たちよ。私たちがアジャヤで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危くなり、:9 ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。…」また、4:8、9にも自分の体験を記しています。「:8 私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれています、行きづまることはありません。:9 迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。」、もう一つ、11:23-27を見ると「:23 彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。:24 ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、:25 むちで打たれたことが三度、石

で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。:26 幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、:27 労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」

このように私たちがこの手紙を見ただけでも、パウロがキリストの福音のために、ありとあらゆる迫害や困難を経験し苦しんでいたことを見て取ることができます。パウロは、私たちが人間的に考えるなら、希望や喜びを失っても仕方がないと思えるほどの壮絶な痛みを味わっていたのです。でも、そのような苦しみの中であって彼は、自分の主人であるキリストも同じように世に憎まれ殺されたということを感じていました。だからこそ、確かに苦しいけれど、自分は主の足跡を辿っているのだと確信して、そのような困難の中にあっても、主にいつも依り頼み、忠実に歩み続けようとしていたのです。そのように忠実に歩もうとしていましたが、彼の周りにはいつも様々な困難や苦しみが彼を取り囲んでいました。

しかし、彼が味わった苦しみは、皆さんご存じの通り、この世からのものだけではありませんでした。彼は自分の愛した教会からも傷つけられることがあったのです。もっと言えば、自分が愛したコリントの兄弟姉妹からも大きな悲しみを味わうことがあったのです。先ほど読んだみことばの続きにこのようなことばが記されています。11:28、29「:28 このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。:29 だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられましょうか。」、パウロは数えきれないほどの問題を教会の外にもっていましたが、彼は教会内、もっと言えば、同じ主を愛する信仰者の間であって、神の家族の間においても大きな重荷というものをもっていたのです。では、パウロはいったいどんな重荷を抱えていたのでしょうか？パウロとコリントの教会との間にはどのような問題があったのでしょうか？

●コリントの教会との関係

ここで皆さん、ちょっとパウロとコリントの教会との関係を思い返してみてください。パウロは第二次宣教旅行の道中で初めてコリントの町を訪れました。そこに一年半滞在して人々に熱心に福音やみことばを教えました。1年半、18ヶ月という期間は、あのエペソの町で働いた期間に次ぐ二番目に長い期間でした。パウロはそれほどまでに彼らのことを愛していたからこそ、それだけの時間を過ごして、自分自身のことを犠牲にして彼らに仕えていたのです。そして、そのような働きの結果、コリントの教会はそこに誕生しました。

さて、教会が誕生した後、パウロはその地を去って行きます。別の場所へと行ったのです。パウロによって教えられたこのコリントの教会は、変わらず忠実にパウロの教えを守って成長し続けていったのでしょうか？残念ながらそうではありませんでした。これほどまでにパウロが時間を取り深い関係にあった教会にもかかわらず、悲しいことに、彼らはパウロの働きを裏切るような行為を取ったのです。何をしたのか？彼らは教会に入り込んで来た偽教師たちを受け入れて、その者の教えることばや福音を信じるようになっていったのです。この偽教師たちは、パウロが教えていた福音とは全く異なる福音を教会にもたらそうとするような人物たちでした。

皆さん、偽教師の立場に立って考えてみてください。彼らは新しく入って来て、パウロが立てたことを壊そうとするのです。別の福音を語ろうとしました。彼らがしたことはパウロの影響を教会から取り除くことでした。そして、そのために彼らはパウロの評判を落とすような嘘を流したのです。また、何よりもパウロがイエス・キリストの使徒であるということに疑問を呈し、その權威をないがしろにしています。そして、驚くべきことに、そこにいたコリントの兄弟姉妹たちは、1年半という時間をパウロとともにし、自分たちに愛をもって犠牲を払ってくれたパウロのことばや教えを簡単に捨てて、突然入り込んで来た偽教師たちの嘘を信じていくのです。

いろんなことが考えられますが、それだけ偽教師の嘘が巧みだったということですか。もう一つ考えられることは、パウロはどれほど辛かったことかです。あれだけ時間をとらしてみことばを教え続けたにもかかわらず、パウロのことをよく知っていたにもかかわらず、そんなコリントの教会の人たちは自分を見捨てて違うところに行くのです。でも、パウロはそれを聞いてもコリントの人たちに対する愛が変わることはなかったのです。ですから、コリントの教会を愛していたパウロは、彼らの許を直接訪れ

問題を正そうとしたのです。直接行きました。

でも、残念ながらこの訪問は悲しい結果に終わってしまいました。コリントの教会はパウロが指摘したその間違いを認めないばかりか、その中のある人物は、パウロを教会全体の前で批判して侮辱しました。大胆にもそのような罪を犯した人物をコリント教会の人たちは正しくさばくのではなく、逆に罪を正そうとしたパウロを拒絶して、パウロを攻撃したのです。そのときの訪問がいかに悲しいものであったのかをパウロは振り返って、今見ているⅡコリント2：1を記しました。「そこで私は、あなたがたを悲しませることになるような訪問は二度とくり返すまいと決心したのです。」と。パウロはコリント教会の人たちを愛していました。でも、その愛していた人たちに拒絶され、攻撃されたのです。パウロは非常に大きな失意の中にいました。受けた余りにも酷い痛みのゆえに、彼らのもとを再び訪れることさえ望みませんでした。それだけ彼は傷つけられたのです。でも、そのような状態になってもなお、パウロのコリントの教会に対する愛というものは変わりませんでした。だからこそ、彼はコリント教会に対して、彼らの持つ間違った態度や罪に対して、それを厳しく責める手紙をエペソの町から彼らに書き送ろうとしたのです。そしてその時に抱いていた思いに関して、今見た箇所続き2：4にこのように記しています。「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。」と。

パウロのコリントの教会に対する愛はいろいろなところに見ることが出来ます。パウロは非常に大きな悲しみをコリントの教会から受けました。でも、彼の愛は少しも変わらなかったということです。そして、その思いから愛する兄弟姉妹への思いをもってパウロは涙を流しながら、彼らが間違った道から立ち返ってくれることを祈って手紙を書き記すのです。この手紙は一般的に「厳しい手紙」と言われています。この手紙は聖書には含まれていませんが、パウロがコリント教会の人々に送った手紙の一つとして考えられています。そのようにして神のことばを見ることが出来ます。

パウロはそんな厳しい手紙を書いて、それを自分の同労者であるテトスに託して、自分の代わりに送り出したのです。自分が最初行ったときは酷い目にあつたから、彼らを悲しませたから、今度は代わりにテトスに行かせました。送り出されたテトスはコリントの教会に手紙を無事に届けて、その手紙を読んだ彼らがどのように応答するのかを確認して、そして、トロアスという場所でパウロと落ち合う予定になっていました。今日のレジメに地図を載せておきました。パウロはエペソの町からコリントの教会に手紙を送りました。テトスはコリントに行つて、その帰りにトロアスで落ち合う予定になっていたのです。

パウロはそのようにいろいろな思いをもってテトスを送り出しました。そして、パウロはテトスの帰りをトロアスで待っていました。そのときの彼の心の様子が2：12－13に記されています。「12 私が、キリストの福音のためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いてくださいましたが、13 兄弟テトスに会えなかったので、心に安らぎがなく、その人々に別れを告げて、マケドニアへ向かいました。」、皆さん、何が書かれていたか分かりましたか？パウロは非常に大きな悲しみや嘆きというものを心に覚えていました。考えられますか？あのパウロです。「神の恵みの福音をあかすためなら私のいのちなど少しも惜しいとは思いません」と述べていたパウロが、トロアスで神様が福音伝道の門を開いていたにもかかわらず、そこを去ってマケドニアへと出て行くのです。どうしてだと思いますか？それはトロアスで落ち合う予定になっていたテトスに会えなかったからでした。彼の心に平安がいっさいなかったのです。皆さんちょっと想像してみてください。そのようにテトスに会えなくてマケドニアへと向かっていくその道中のパウロの心の思いはどれほど動揺していたことか…。

トロアスで会う予定になっていたのです。でも、テトスはその場に現れませんでした。いったいどうなっているのだろうか？どうしてテトスはこんなにも時間がかかっているのだろうか？もしかすると、コリントの教会で何か大きな問題があったのではないか？私のことを非難した人たちが今度はテトスのことを辱めたのではないか？ほんとに彼は無事なのだろうか？それだけではなくて、コリントの兄弟姉妹は本当に私の送ったその手紙を読んで、今度こそ間違いを認めて悔い改めてくれるのだろうか？それとも前回と同じように偽教師たちの嘘にだまされて反発して、それでも飽きたらずに、私の厳しい手紙を読んで、やっぱりパウロは愛のない人だとそのように非難するようになっていないだろうか？これまでに教えた真の福音を彼らが拒絶して、今のまま歩み続けていくなら、教会はいったいどうなってしまうのだ

ろう…と、いろいろな大きな不安や大きな恐れを抱えながら彼は、どこかでテトスに会えるのではないかと願いを持ちつつマケドニアへと向かっていったのです。

それが、パウロがこの2：13のところまでに記していた物語でした。そこで物語は一旦途切れるのです。2：13まで物語を語ってきたパウロは、2：14から今日私たちが見ていくテキストの一つ前まで、つまり2：14ー7：4まで、この長い箇所ではパウロが記しているのは、自分の使徒としての働きについてでした。どうしてそのようなことをしたのでしょう？それは、パウロのことを非難している偽教師たちが、パウロの使徒としての働きの資格を非難したからです。それに対してパウロは反論をしたのです。パウロは自分が使徒として正しい資格を持っていること、その権威があるということを長い期間をかけてこの箇所を通して説明しています。

そして、そのことを7：4までに語った後で、今回のテキスト7：5から、パウロは再び物語の続きを記していきます。2：13の最後には書いていました。「…マケドニヤへ向かいました。」と。そして、次に7：5に「マケドニヤに着いたとき、…」と続いています。様々な苦難を経験して心に大きな痛みを負ってマケドニヤへとやって来たパウロでしたが、いったい彼はその後どうなっていったのでしょうか？パウロとコリントの教会との関係はどうなったのでしょうか？そのことを今日からともに学んでいきます。7：5から16まで、今回の学びをシリーズで見えていきますが、この箇所を読みますから追ってみてください。

「5 マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。：6 しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。：7 ただテトスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。：8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、：9 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。：10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。：11 ご覧なさい。神のみこころに添ったその悲しみが、あなたがたのうちに、どれほどの熱心を起こさせたことでしょうか。また、弁明、憤り、恐れ、慕う心、熱意を起こさせ、処罰を断行させたことでしょうか。あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明したのです。：12 ですから、私はあなたがたに手紙を書きましたが、それは悪を行った人のためでもなく、その被害者のためでもなくて、私たちに対するあなたがたの熱心が、神の御前に明らかにされるためであったのです。：13 こういうわけですから、私たちは慰めを受けました。この慰めの上にテトスの喜びが加わって、私たちはなおいっそう喜びました。テトスの心が、あなたがたすべてによって安らぎを与えられたからです。：14 私はテトスに、あなたがたのことを少しばかり誇りましたが、そのことで恥をかかずに済みました。というのは、私たちがあなたがたに語ったことがすべて真実であったように、テトスに対して誇ったことも真実となったからです。：15 彼は、あなたがたがみなよく言うことを聞き、恐れおののいて、自分を迎えてくれたことを思い出して、あなたがたへの愛情をますます深めています。：16 私は、あなたがたに全幅の信頼を寄せることができるのを喜んでいます。」

さて、皆さん、悲しみにくっていたパウロはどうなっていましたか？彼の心にあった失意や痛みは取り去られていました。あれだけの苦しみを味わっていたにもかかわらず彼は慰めを受けていたのです。気づきましたか？このたった12節の間で彼は「喜び」「喜んでいます」ということばを5回も繰り返しています。大きな恐れを抱いていたパウロの心にはもう恐れがなくなって、喜びが満ち溢れていました。どうして彼の心はこのように変えられたのでしょうか？それは、テトスにマケドニヤで再会できたこと、そして、それ以上にその彼から愛するコリントの兄弟姉妹たちが自分たちの罪を悔い改めたという知らせを受けたからでした。あれほど頑なに間違いを認めなかったその教会が、過ちを認めて心砕かれたことでこじれていた関係に再び喜びがもたらされ改善へと向かっていくのです。心から愛していたコリントの兄弟姉妹との間にあった壊れていた関係が修復できたというその事実が、パウロの心に安堵と喜びをもたらしたのです。

最後、16節に書いていました。あれほど自分を裏切って悲しませたけどでも「私は、あなたがたに全幅の信頼を寄せることができるのを喜んでいます。」と。壊れた関係が全幅の信頼を寄せるような関係と変えられていったのです。そして、このみことばから私たちが今回学べることは、罪によって壊れた関係

に対してどのように向き合うべきなのかということです。聖書はそのことを教えてくれています。

○壊れた関係を修復するための八つの要素

パウロを悲しませた関係が全幅の信頼を寄せるといふ関係に変わるまでどのようなことが為されたのか？パウロはここで「壊れた関係を修復するための八つの要素」を教えてください。ですから、今日から一つずつ時間をかけてともに学んでいきたいと思ひます。そして、もし、今まさに兄弟姉妹との間に問題を抱えている方がおられるなら、もっと言えば、どんな関係でも同じです。夫婦間であろうと親子間であろうと、様々な関係において難しさを覚えている方がおられるなら、よくこのみことばの声に耳を傾けてください。感謝なことに、今はそのような怖い関係はありませんと言われる方も、最初にも言いましたが、私たちが罪を持っている以上だれかに罪を犯すことも、反対に、だれかがあなたに対して罪を犯すことも、これから先必ずあります。だからこそ、神様がそのような場面に直面するときにはどのように向き合うべきなのかということをはっきりと教えてくれている以上、そのみことばを実践する者として私たちはしっかりと備えていく必要があるのです。ですから、ぜひ、この学びが皆さんの励ましになることを心から祈っています。神の家族として私たちがともに生きていく中であつて、問題はありますが、みことばが私たちにどう向き合うべきかを教えてくれている以上、そのみことばに忠実に従っていき、私たちがますます一致して神の栄光を現す、そのような教会になることを心から願っています。

ということで、ここまでがイントロでした。残った時間で「壊れた関係を修復するための要素」を一つだけ見ていきたいと思ひます。

1. 慰めを与えてくださる神様 5-6節

関係修復の要素の一つ目として挙げられるのは「慰めを与えてくださる神様」の存在です。コリントの教会との関係で思い悩んでいたパウロの心に慰めを与えてくれた、その源となったのは他のだれでもない神様でした。そのことが5-6節に記されています。5節からもう一度見ると「:5 マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。:6 しかし、氣落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちに慰めてくださいました。」、今一度、その時のパウロの様子思い浮かべてみてください。パウロはトロアスでテトスと落ち合うことを約束してテトスに手紙を託し、コリントへと向かわせたのです。そしてその後、パウロ自身は予定通りトロアスに來ました。でも、そこに愛するテトスの姿を見つけることは出来ませんでした。テトスに会うことができなかつたのです。だから、パウロの心には平安がありませんでした。余りにも大きな不安を覚えてしまったパウロは、その場でじっとしていることができずにテトスに会うためにマケドニヤの地へと向かって行くのです。マケドニヤにパウロは無事に到着しましたが、5節で見る通り、彼はまだその時には様々な不安を覚えていて、彼の心には少しの安らぎもありませんでした。

パウロは「…さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。」と言っています。この「外には戦い」という「戦い」と訳されていることばは「揉め事、言い争い、対立」といった意味が含まれています。想像できますね。福音伝道に熱心だったパウロは訪れる町々、行くところ行くところでもいつも多くの人々と真理について論争していました。そして、常に大胆にキリストの証しを立てようとした彼の身には、光を憎む者たちからの厳しい迫害を受けていたのです。どこに行ってもそれはありました。マケドニヤにやって來てもその状況は変わることはなかつたのです。彼はそこにあつても様々な外からの戦いというものにさらされていたのです。でも、そのような外側からの苦しみに加えて、彼のうちには恐れが存在していたのです。

彼はコリント教会との関係において心をひどく悩ませていたのです。その思いをずっと持ってマケドニヤにやって來たのです。だから、パウロは文字通り、肉体的にも精神的にも疲れ果てていました。もう疲れ切っていたのです。だから6節の初めにこのように書いています。「しかし、氣落ちした者を…」と。彼は「氣落ちした者」になっていたのです。この「氣落ちした」ということばは「意氣消沈する、落胆する」という意味で用いられますが、元々は「身分の低い、謙虚な」という意味のことばです。つまり、氣落ちした者は低くされた者、様々な苦しみによつて圧迫されて下へ下へと押しやられた者、そのような者のことを表しています。

考えてみれば、パウロは外側の問題もたくさん抱えていましたし、内側にもたくさんの悲しみを抱えていました。そのような大きな問題を抱えていたゆえに、パウロはどんどん失意のどん底へと突き落され、心はどんどん低くなつていたのです。マケドニヤに到着したときのパウロには、どう考えても希望

を見出せる状況ではなかったのです。彼は気落ちしていました。そのように押しつぶされてしまったパウロは意気消沈して希望など見出せなかったのです。彼の心にはこのとき、喜びや平安などはありませんでした。でも、6節を見ると、気落ちして終わりではなかったのです。弱り切ったパウロを慰めてくれる存在がいたのです。それこそが神様でした。「しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちが慰めてくださいました。」と、気落ちした者を慰めてくださる神は私たちをも慰めてくださるのです。安らぎのなかった失意の中にいたパウロの心を慰めることができた唯一のお方は神様だけでした。そして、これと同じこと、神様こそが慰め主であるということをパウロは同じⅡコリント1：3-4でもはっきりと述べています。「3 私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。」、ここでパウロは、特に二つの表現を用いて神様を表しています。「慈愛の父」と「すべての慰めの神」です。それぞれどういう意味でしょうか？

a) 慈愛の父 :

「慈愛の父」に関しては、思い返してみてください。あのシナイ山において、神様がモーセの前を通り過ぎられた時、神様はご自身のことをこのように宣言しておられました。出エジプト記34：6-7に書かれています。「6 【主】は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「【主】は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、7 恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」と。パウロが「慈愛の父」と述べたとき、それは神様のご性質が「あわれみ深いお方」だということを表していました。神様はその存在そのものがあわれみに富んだお方だということです。そして、この神様のあわれみは決して変わることはないからこそ、かつての信仰者たちもその神様のあわれみにどんな状況にあっても信頼し、その内に希望を見出そうとしていたのです。

たとえば、エルサレムの陥落を前にして深い悲しみと嘆きの中にいたエレミヤもこのようなことばを口にしていました。哀歌3：22-23に「22 私たちが滅びうせなかったのは、【主】の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。23 それは朝ごとに新しい。あなたの真実は力強い。」、間違いなく、このときのエレミヤは深い悲しみの中で彼の心には嘆きがあふれていたのです。しかし、たとえ、そのような絶望的と思える状況の中にあっても、彼は一つのものに心を留めていました。一つの存在に心を留め続けていたのです。それこそが、決して変わることはない神様のあわれみでした。あわれみ深い神様に彼は心を留め続けていたのです。どれほど目の前に起こっている状況が悲惨なものであったとしても、どれほど自分自身の心に悲しみがあつたとしても、それでもなお絶対に変わることはないすべての主権者なる主のあわれみは尽きることがないことを知っていた彼は、そこに信頼して希望見出そうとしていたのです。主はいつもどのようなときも変わることはないあわれみ深い慈愛の父であると、そのことをパウロもよくわかっていたのです。その方の偉大なご性質をパウロはよく覚えていたのです。だからこそ、その方のうちに慰めを見出すことができました。

b) すべての慰めの神 :

でも、パウロはそれだけでなく、このお方は「すべての慰めの神」と表現しています。この「慰め」ということばですが、皆さん「慰め」ということを考えるときに少し注意しないといけないことがあります。それは慰めの神様の慰めというのはこの世が考えているようなものでは決してないということです。もう少し具体的に言うなら、この「慰め」とは「痛みや苦痛に対する同情、そこから解放されることで得られる感情的な安堵感」と、そういうことを表しているのではないということです。では、どうということでしょうか？それを理解する上で大切なことは、「慰め」と訳されていることばの意味です。皆さん、覚えておいてください。このことばは元々「～に連れ添って励ます、勇敢な、力強い」というそのような意味が含まれています。

つまり、この神様にある慰めというのは、単に、その人のうちから痛みを取り除いて心に安らぎを与えるようなものではなくて、たとえ、困難の中にあろうともそれを耐え忍ぶことができるように神様が与えてくださる偉大な力と励ましだということです。慰めとは「励まし、力」だということです。それに関して、デービット・ガーランドという注解者は分かり易くこんなことばを残してくれています。

「パウロが考えている慰めは、気だるい満足感とは全く異なるものです。慰めは、痛みを和らげるだけ

の鎮静剤ではなく、心と思いと魂を堅固にするものなのです。神の慰めは、弱った者の足を強め、沈んだ心を支え、人が折れない意志と絶えることのない確信をもって、人生の困難に立ち向かうことができるようにするのです。」(デービット・ガーランド)、弱った足を強めてくださり落ち込んだ心に励ましを与えてくださり、どんな困難があろうともその者が歩み続けるその助けと力を与えてくださる、それが神様が与えてくださる慰めだということです

それが神様が与えてくださる慰めであるとするなら皆さん、なぜ、パウロは困難の中にあっても変わらずに歩み続けることができたのでしょうか？そんな悲しみの中にあっても喜びを見出すことができたのでしょうか？理解できますか？これまでも見て来たとおりに、パウロは多くの苦しみを経験して来ました。キリストの福音を軽蔑するような者たちから激しい迫害を受けて、肉体的に私たちには想像できないほどの痛みや苦しみを彼は味わったのです。むちで打たれることもあり、牢に入れられたり、度々眠れぬ夜を過ごすこともあり、飢え渴き、寒さに凍えて裸でいたこともありました。そのような外側からの激しい苦難によって苦しめられていただけでなく、彼は自分自身が愛して犠牲を払って仕えていた神の家族からも酷い扱いを受けて、精神的にも傷つけられていたのです。

不思議だと思いませんか？そんな苦しい中にいたにも関わらず、パウロは「どうしてこんな痛みや涙を味わわなければならないのか…」と神様に不平不満を抱くこともなく、何よりも、彼は一度ならず何度も自分を裏切ったコリントの兄弟姉妹たちを見捨てることはなかったのです。彼らに対して変わらず愛を示し続けようとしたのです。確かに、彼も失意のどん底に陥ることがありました。困難の中でもがき苦しむことも経験していました。でも、パウロはそのような中にあっても慰めを見出すことができたのです。歩み続ける力を見出すことができました。なぜなら、彼はどのようなときも主から目を逸して歩むことがなかったからです。

そんな彼だからこのように言うことができたのです。Ⅱコリント 12 : 9-10 「:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。:10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」と。私たちもよく覚えているみことばですね。どうしてこんなことばを残すことができたのでしょうか？間違いなく、パウロは主の慰めの力がどんなものかをよく理解していたからです。弱さの中で、困難の中で、弱った足を強めてくださり落ち込んだ心を励ましてくれる、その主の力がどれほどすばらしいものなのか、どれほど偉大なものなのか、そのことを彼は自分のこととして分かっていたのです。彼はそんな困難の中で自分のうちにそれを乗り越える力があるなどと考えることはありませんでした。パウロはただ慰めの主であり慰めの源であるこの方のうちにのみ、どんな困難な状況であろうと自分を励まして奮い立たせるその力があるとそのように信じていたのです。そして、神様はパウロのうちに確かに働いておられました。

パウロはこのように様々な外側からの苦しみを味わい、また、愛する教会の兄弟姉妹との問題を味わって、悲しみを覚え失意や落胆を覚えることがありましたが、パウロはどこに目を向けていたのでしょうか？パウロは一番初めにどこに助けを見出すことができたのか？それは他のだれでもない神様だったということです。問題を解決するときには私たちが何よりも見なければいけないのは神様です。皆さん、自分自身のことを考えてみてください。果たして、私たちが困難や難しい状況に直面するとき、私たちはどこにその解決策や力を見出そうとするのでしょうか？慰めの源である神様に目を向けて、この方に自分のすべてをゆだね続けているのでしょうか？それとも何か自分のうちにその状況を思いのままにする力があるかのように、自分の知恵や力に頼っていないのでしょうか？パウロは慰めの神様のうちに平安と喜びがあることを分かっていました。では、私たちはいったいどこに自分の心の平安、喜びを見出そうとするのでしょうか？皆さん、問題が苦しくなればなるほど、状況が変わらなければ変わらないほど、どこに喜びや平安を見出そうとするのでしょうか？私たちが心を留める場所は、あれほど痛みや悲しみを負っていたパウロのその心を容易に変えることができたそんなすばらしい神様の慰めの力のうちであるはずで

○まとめ

感謝なことは、私たちはたとえどんな問題を抱えることがあったとしても安心してゆだねることが出来る存在がもういるということです。恵みによって、キリストによって、私たちの信仰によって救われ

私たちひとり一人は、もうすでに神の家族とされました。私たちは「アバ、父」と呼んで、その方に祈りを通して私たちの思いをゆだねることができます。そのようにしてこの方の助けをもらいながら、この方に依り頼みながら歩いていきます。でももし、この方を忘れて、直面している問題の大きさや辛さに心を奪われてしまうなら、私たちは次第に希望を失ってしまうのです。あわれみ深い慰め主である神様から私たちに必要な慰めは来ると、そのように確信することができます。パウロはそのことを信じ続けていました。そのことを自分のこととして経験していました。だからこそ。パウロは神様に信頼して歩み続け、そして、その方に喜びと平安と慰めを見出したのです。私たちも同じ神様に依り頼んで歩いていくことができます。みことばが明らかにしてくれているその方に信頼していくことができます。

もし、この中にまだ救い主イエス・キリストを自分の主として認めていない方がおられるなら、救い主として信じていない方がおられるなら、その方にとってこの神様は慰め主ではなく、さばき主だということを覚えておかなければいけません。聖書ははっきりと言っています。神様に逆らう者に対して、神様に罪を犯す者に対しては、必ず御怒りがその上に注がれると。必ず、主の前に立つ日がやってくるのです。でも、まだ、そのための時間は残されています。今日というこの日に、この主イエス・キリストを自分の救い主として信じ、自分の罪のために十字架にかかってくださったその方を主と信じ受け入れて、その方のために生きるその歩みを始めてください。

兄弟姉妹の皆さん、パウロはこの後さらに詳しくパウロとコリントの兄弟姉妹との間にどんなにすばらしいことが起こったのか、どのようにしてそのこじれた関係、壊れた関係が修復していったのか、そのことを私たちに教えてくれています。そのことは来週からのお楽しみです。

今日、私たちが学んだこと、それはどんな問題があろうとも私たちは慰め主である神様にゆだねることができるということです。そして、この慰め主の力のうちに私たちはいつも希望を見出すことができます。ですから、この方にいつも心を留めて、そして、どんな困難を経験することがあっても、励ましてくださるそのお方に期待して、依り頼んで、ともに主を拝する者としてこの一週間も歩いていきましょう。